

萩の露

雨の多い年だった。そのために夏季の湯水もなくて慈雨だったわけであるが、庭の百日紅は咲き遅れた。七、八、九の夏の三ヶ月を紫紅の花を保ちつつづけるので、百日紅の名があると聞いて以来、なるほどと感じつつ毎夏を過して来たものであったが、この年はそうは行かなかつた。七月はおろか、八月になつても開かず、天気の良い日は数えるほどしかなかつた。それは自分の家の庭ばかりでなく、いつも見事な花を楽しませてくれる近所の家のもそうであつた。やつと八月の終り頃になつて、申訳なさそうに一枝か二枝の梢の先がふくらみ始めたので、それから書齋の雨戸を明ける度に、何かいたわるような気持ちで梢を捜す毎朝だつた。

老人の日の連休の朝もやはり雨だつた。雨戸を明けた瞬間に、この朝は百日紅の梢に目をやるより先に、花はまだ開かぬままに

千谷七郎



縁側に頸をすり寄せる如く揺れる白萩の葉の露が、雨の薄明に柔らかくて深い光をきらめかせているのが目に入った。揺れる度に反射の光芒が織りなす模様は、咲きこぼれる白萩の花さながらでもあり、珠玉を散りばめてもこれに及ぶまいと思われるぐらゐで、清楚そのものであつた。敷島の大和心を人問わば、かそけく揺れる萩の露、とでも詠み変えて見たい思いもしているうちに、ひらめくように其角の一句が思い出されると一緒に、その意味が初めて心にしみ通つた。

萩のつゆはまぐり貝にくすり哉 其角

というのがその句である。さっそく縁側から引き返して書架の其角句集の一つを繙いた。其角の父東順は江戸で医を業としていたが、既に六十歳のはじめに医業を離れて、もっぱら筆を楽しみにして俳諧の友となつていた。元禄六年（一六九三年）八月二十八

日七十二歳で他界したのだが、七月の「秋の初めより、老父いたく悩つきて、けふしらず、明日またたよりなし。一家合信のおもひ、我身ひとつにせまりて、万事たゞゆめうつゝ成なぐさめ也。

医療、薬力ともにつきて、ねぶれるやうに、かのむかへこそまてと、此世におもひ残せるさま露なし」というのが、病床の老父の容態と心境、それに回復を祈る一家の願いを其角自身が父追悼句集『秋の露』に述懐するところである。その頃其角の妹が老父平癒の願を薬師如来にかけたなどのことがあって、そのついでに其角が書いて「父のふしける蚊屋の中にはりて、目ざまし草にと」慰めたのが上述の一句であった。

このところ一滴のくすりものどを通らぬ老父の容態である。あの清らかに澄み切った秋の露でこそ、はまぐり貝に収めた練ぐすりをとくしてくすりにすれば、さぞ験もあるのではなからうかという句の心であろう。そういう思いで書いて臥床の蚊帳の中にはったところ、「此日より不可思議の感応ありて、……いさゝかの食事も、十が一つは胸膈にかよいて」容態をもちなおすことができ、やがて八月十五日の名月を迎えた。

その間、幼少から信濃にやられて、やはり医を業としていた弟玄適が六月の初めから八月のはじめまで、看病むつまじく、枕のちりを掃っていたのにも、病父はみずから待期のさかすきを取っ

て「愛別の情欲なお後の世のまよひなれば、我息のかよはん所を厭離せよ」と思い切った暇乞いを与えたのも旬日前のこと、それからやがて今宵の名月に、其角がこの父のいさぎよさを「受持法華の正眼たるべし」と思い起こして、法華経薬王菩薩品の仏座の高さ七多羅樹とあるにちなんで、父のために蚊帳を上げて月の秋空を案内する気持ちで

空や秋蚊屋をあぐれば七多羅樹

と書けば、老父東順は

月にかがやく五色の雲

と、ふるえる病手をととのえながら書くうちに、此息のかよわんうちに、とすめる筆のかずかずの中に、「七十三歳の老医、みづから何の薬をかたのまんやと杜子美のもとむる所をも求め」なかつた。（杜甫は成都の草堂で「江村」の詩に「多病須る所は唯薬物」と詠ったけれども、老父はそうではなくて）

「死病には千ぐさの露の験もなし 東順かくいさぎよき明らかめなれば、死生在命富貴ねがひなし、良夜千金の期也」というわけで、この名月の夜に一樽の酒を求め、父の望むままに友を招いて対酌の間の句々がおのずから即興となったという。「死生は命に在り、富貴ねがひなし」。私どもが現代の多忙に追われて、長い間忘れていた言葉ではなかつたか。なんと腹の底までしみ通る言

葉であることか。芭蕉の稿に成る『東順伝』に、「ことし七十歳ふたとせの秋の月を、病める枕のうへに詠めて、花鳥の情、露を悲しめる思ひ、限りの床のほとりまで、神みだれず」としるさるであるのもなるほどうなずかれる。

それにしても其角には七年前に他界した母の^{おちかひ}の去り難いにつけても、父のその思いをもおしはかり、更にまた、この月に先ほど信濃に帰って行った弟の^{おちかひ}の^{おちかひ}を見てわれとわが心さぐさめかねて

信濃にも老が子はありけふの月 其角

と、書きつゞけて、共に信濃に思いをさせているだろう父の心に寄せて差し出せば

子と姨とたがかへて見んけふの月 東順

と書いたのが父の書きおさめであった。

この句の傍にある更級の^{おぼすてま}姨捨山の物語は、既に『古今集』による人知らずの古歌もあり、詳しくは十世紀に成ると伝えられる『大和物語』に伝えられ、『今昔物語』にも引きつがれ、芭蕉の『更科紀行』にも詠うたわれるといった工合に、非常に古い昔から代わが国民の心のあるいは打ち、あるいはいましめるように伝統していたものであった。よく知られている通り、信濃の更級に住んでいた男が、若い時に母親が亡くなって、伯母を親代りにして

仲むつまじく暮らしていたが、妻の心がよくなかった。姑が年をとるにつれて腰が曲って行く醜さを見て、この嫁はますます厄介がって、とうとう夫に「連れ出して、深い山の中にでも捨てて来てくれ」とばかりに言い立てて、夫をせめたてた。とうとう満月の夜、男は「寺で有難い法ほうふ会があるから、見せて上げましょう」と^{おちかひ}姨をだまして、下りて来られそうもない高い山において逃げて帰った。

さて、男は家に帰って見るに、長年、親のように自分を養育してくれて一緒に生きて来た日々がどっと思ひ出されて悲しくなっているところに、この山の上からこの上もなく澄み切って明るい月が上って来たのをながめて一夜眠れず、悲しみをおさえ切れな^いいで次の歌をよんだ。

わが心なくさめかねつ更級や姨捨山に照る月をみて

こうよんで、あくる朝迎えに行つて連れ帰ったということである。そして『大和物語』は、このことから後、この更級の山を姨捨山というようになったし、姨捨山を慰め難いことの縁語に言うようになった、とつけ加えている。親子の情、人情の押え難さを言ったのであろう。

姨捨山をこのように顧みて、あらためて其角東順の応答の句を味わえば、いさぎよい離別りべつの際ときの父と子に迫る情こころの馥郁ふよくたる余香

が千古万古に漂う思いがする。其角は三十三歳であった。

芭蕉は貞享五年（同年九月三十日元禄と改元）八月中旬、信州

更科の名月を見るために越人を伴なって木曾路を上った。その

『更科姨捨月之辨』に「……その夜（名月の夜）さらしなの里にいたる。山は八幡といふさとより一里ばかり南に、西南によこを

りふして、冷じう高くもあらず、かどかどしき岩なども見えず、

只哀ふかき山のすがたなり。なぐさめかねしと云けむも理りしられて、そぞろかなしきに、何ゆゑにか老たる人をすてたらむとおもふに、いとゞ涙落そひければ、

佛あまのけは姨おとひとりなく月の友　ばせを」

と書きつけている。姨捨山の月を見ていと、ひとり泣いている姨の佛が目に浮んで来る。この佛を今宵の月見の友にしよう、という意であろう。後に元禄五年刊の其角『雑談集』に「翁北国行脚のころ、さらしなの三句を書とめ、いづれかと申されしに、佛や……といふ句を可然と定たり、と申ければ、（翁は）誠しか也。一句人目にはたゞず侍れとも、其夜の月の天心にいたる所、人の

しる事少なり、と悦び申されけり」と書いている。「其夜の月の天心にいたる所」とは、更科の男が夜一夜眠れぬままにながめた所でもあった。前に引用した芭蕉稿の『東順伝』の箇所につづいて「……限りの床のほとりまで、神みだれず。終にさらしなの句を

かたみとして、大乘妙典のうてなに隠る」と追悼しているのも、本当にそうだっただろうとうなずかれる。

八月十五日のこの夜の前後数日、病父の容態もやや持ち直して

いたのだろう。八月十八日の夜、其角は岡丈等と歌仙を巻いている。「病父、心よしと聞えけるに、とみのいとまたまはりて、浅草寺に詣ける。誘引の人々、泉陵院に立よりて月見しければ、即興」として、

寺の月葡萄ぶどうなます膾は葉にもらん　其角

と、渋い発句を出している。

しかし、八月二十八日、東順は遂に薨じた。そして翌「八月二十九日の昼、亡父葬送の場にて、崩心の悲を懐きて、四生の起別をしる」と詞書きして

一歛に蟬も木葉も脱哉おと　晋子

とある。

わが元禄の頃には、こんな父と子があつた。

老人の日の雨の朝、庭前の秋の露に誘われて、こんな一日を書齋で過した。「死生在命、富貴ねがひなし」と、久しぶりに清涼の氣に洗われた有難い老人の日であった。今はもう秋の花もあらかた散つて、黄菊、白菊がふくらんで来た。やはり雨の日の多い年のようなだ。来年の天候はどんなだろうか。（東京女子医科大学）